

二〇一七年二月二三日(参加者一六名)

境内が迷路となりし年の市	せいじ
裸木にとり囲まれし鏡池	せいじ
冬日燦池塘の松にかげろひぬ	せいじ
下馬標深き落葉に埋もれけり	せいじ
霜晴に凜と義太夫始祖の墓	菜々
冬晴へ反る本堂の大藁	菜々
これ何と問へば叱られ年の市	菜々
営業中らしき茶室に冬灯	たか子
似て非なる千体地藏冬うらら	たか子
極楽の庭に千両万両と	はく子
堂屋根に鳩の居並び日向ぼこ	はく子
冬鳥の極楽浄土なる寺苑	宏虎
一穢なき空へ万朶や冬木の芽	宏虎
一服す茶室の庭の実万両	満天
冬うらら浄土の庭に点茶受く	満天

裸木のグチヨキパーと仁王立つ 有香

寒あやめ玉の日和をことほげり 有香

幾何模様なせる斎庭の枯木影 明日香

天を突く裸木八岐の大蛇めく うつぎ

二等身地藏冬日にうづくまる 小袖

冬日燦輝く金の鯉の鱗 やよい

仁王門影を正せる冬日かな よし子

枯木立水辺に影を正しけり わかば

定例会みひの選

二〇一七年二月二三日(参加者一六名)